

## コウノトリ野生復帰20年の課題

読売新聞宮津通信部・松田聡

読売新聞宮津通信部の記者で松田聡と申します。兵庫県豊岡市の豊岡支局にいた頃から20年以上、コウノトリの取材を続けてきました。これまで取材でお世話になった方もいっぱいいらっしゃいます。ラムサール・ネットワーク日本のフォーラムにお招きいただき、合わせてお礼を申し上げます。

宮津市は豊岡市から車で東に1時間ほどです。天橋立という景色のいい所があります。隣町にはコウノトリがよく飛んできます。

兵庫県豊岡市でコウノトリ野生復帰が2005年に始まりました。これは初放鳥の写真です。2年後に初めて巣立ってから毎年繁殖に成功しました。大勢の人が巣立ちを見に来て、新聞社や放送局も今か今かと待ち構えました。子どもたちも待っていました。去年は14府県で134羽が巣立ち、生息数は450羽を超えました。こんなにうまくいくとは思っていませんでした。飼育で繁殖に23年間も失敗が続いたからです。

コウノトリがいる場所を分類したデータは見当たりませんでした。韓国のように広大な干潟は日本では少ないので、田んぼや川が多いようです。渡良瀬遊水地のように広い湿地でコウノトリを見かけることは少ないように思います。生息地の分類データが求められますが、田畑のように人工的な場所での生息地整備が必要なのでしょう。高齢化が進み、田畑や湿地を維持する自治体や団体、人を増やすことが課題です。

いい例は関東地方にあります。ここ小山市、それに行方市（なめがたし）、神栖市（かみすし）、小美玉市（おみたまし）、野田市でヒナが巣立ちました。日本コウノトリの会の大坂真希さんによると、繁殖地は利根川水域にあります。関東エコロジカルネットワークでコウノトリとトキの生息環境を整えられています。まさにネットワークになっています。こういったつながりをこれからも大事にしたいですね。

ヒナが一気に増えすぎ、繁殖期の後半になると兵庫県立コウノトリの郷公園の職員は足環を付けるため全国をまさに飛び回っています。2024年には4月から8月まで約50か所で約120羽のヒナに足環を付けたそうです。同じ日に広島、福井、千葉の3か所で作業したこともあったといいます。

高所作業車で高さ約12メートルの巣に横付けしてヒナを捕まえて地上に降ろします。羽毛を取り、血液を採取し、体温を測定し、くちばしなどの長さを測ってから足環を付け、再び高所作業車で巣に戻します。

もともとは親子やきょうだいで繁殖しないよう、1羽ずつ区別するために足環を付けました。豊岡市や兵庫県内であれば、兵庫県の組織である郷公園の権限で行います。県外では、現地の自治体やコウノトリの全国組織 IPPM-OWS「コウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル」の要請や協力として郷公園職員が出張します。

足環で1羽ずつ識別できるので、性別や誕生した場所や日、親やきょうだいを知ることができます。豊岡や渡良瀬など各地で生まれたコウノトリがどこで、どうしているのかが、わかります。コウノトリの行動を科学的に解明できるのです。住民の愛着にもつながります。

これは法令に基づいた義務ではありません。いわば「心意気」です。このため、足環を付けない自治体もあるそうです。予算を付ける理由が法令になれば、首長や担当者の考え一つで断ることもできるのです。今後もヒナの数はどんどん増えるから足環のないコウノトリも増えるでしょう。

飛来先も日本全47都道府県だけでなく、韓国、北朝鮮、中国、台湾に広がっています。生息数と飛来先が増えるにつれ、死ぬコウノトリも少なくありません。シカやイノシシが田畑を荒らさないよう周囲に巡らされたネットに引っかかるほか、送電線や鉄塔に衝突したり、感電したり。車にはねられることも少

なくありません。巣立ちした幼鳥が1年以内に救護や死んで収容されることが目立っています。やはり経験不足も事故の要因のようです。郷公園の獣医師で主任研究員の松本令以（まつもと・れい）さんは「人もコウノトリも住める安全な環境を目指しているが、コウノトリにはまだまだ安全とはいえないのでは」と話しています。

さて、なぜコウノトリを守るのか。どう守るのか。根本的なことを考えたいと思います。貴重だからでしょうか。確かに貴重ですが、それだけではなさそうです。

郷公園の初代研究部長だった池田啓（いけだ・ひろし）さんは、かつて文化庁の記念物担当調査官だった時、ニホンカモシカの保護が大事だと山村の住民に話しました。ヒノキを荒らすので、林業の人から「日本にしかない動物だからといって、こんなにたくさんいるのになんで保護しないといけないか」と怒られたそうです。食害を減らすためニホンカモシカを駆除することになったら、逆に動物保護団体から「人が動物のすみかを奪ったからだ」と駆除に反対されたといいます。立場が変わると、いろんな考えがあり、野生動物の保護で答えは一つではないことに気付いたそうです。立場の異なる人、団体を調整するため、生態学だけでなく、経済学や社会学などいろんな学問が必要とされました。

もう一つ例をあげます。新潟県佐渡市で2008年にトキ野生復帰の初放鳥があった際、環境省佐渡自然保護官事務所で自然保護官、レンジャーを務めた岩浅有記（いわさ・ゆうき）さんに話を聞きました。今は退職し、大正大学准教授です。

初放鳥の頃、島内では「トキばかり優先して」「勝手に決めている」と批判もあったそうです。ある会で放鳥の意義を説明した際、老人が冷めた拍手をした。「大失敗だ」と感じたそうです。「トキという生き物に焦点を当てていたら失敗する。人に焦点を当てないと」と気づき、トキをシンボルにするが、佐渡市の地域づくり、産業なら農業を中心にし、地域が元気になるようにすれば、トキ野生復帰にもいい効果が出てくると思い立ち、有機農業に力を入れる農家や市役所の農業担当者話し合い、野生復帰と市の認証米「朱鷺と暮らす郷」の普及を関連づけるようにしました。すると、放鳥への機運作りがうまく進みだしたという。「トキのことばかり考えたのは独りよがりだった」と振り返っています。

岩浅さんは環境省や国土交通省に戻り、グリーンインフラに関わりました。これから日本はどんどん人口が減ります。自然保護に関わる予算や人が減っても、行政と研究者、ボランティアで担う取り組みが、ボランティアの高齢化で活動が鈍くなる恐れがあっても支えられるよう人的交流、資金調達の仕組みをつくろうと考えたそうです。

人口が減る時代、企業の参加が重要です。TNFD（The Taskforce on Nature-related Financial Disclosures）、自然関連財務情報開示に関するタスクフォースという手法があります。企業や団体が経済活動することで生物多様性にどんな影響があるかを評価して発表し、資金が自然の再生に役立つことを目指しています。自然関連の財務情報を開示し、企業の社会的評価、株主の評価を得る仕組みです。簡単にいえば、企業活動でどれだけ自然を豊かにするのに役立っているのかを財務のデータで示し、社会や株主の評価を受けるのです。環境省と農林水産省、国土交通省などが経団連と一緒にTNFDを進めています。

経済活動と環境保護を両立させる大きな動きです。発展途上国と先進国で「フェアトレード」、公正な貿易を目指す動きがあります。児童を働かせない、強制労働させない、長時間労働などを防ぐ労働環境の改善を目的に、コーヒーやカカオ、綿などの商品を認証する制度が運用されています。TNFDをうまく活用し、企業活動の中に湿地保護も含めるよう促さないでしょうか。

さて、コウノトリと市民社会のつながりをどう広げるか。どういうあり方が理想かは、実は私にはよくわかりません。これは豊岡の田んぼで草を取る農家とコウノトリです。もう1枚はフランスのストラスブ

ールの公園です。遊ぶ子どものすぐ横にシュバシコウが飛んできます。まるでハトやカラスのようでした。

コウノトリは14府県で繁殖していますが、人工巣塔や電柱の上がほとんどです。ヒナの姿がみたいという地域が多いですが、有機農業を広げるなど環境をよくしようという動きにつながっているのでしょうか。全国で豊岡をモデルにして取り組まれています。気候や地形、歴史や文化などそれぞれの地域で事情は異なります。いろんなモデルをつくり、情報を交換し合える関係になってほしい。最初はコウノトリ「を」守るだけしかできないかもしれませんが、コウノトリ「も」守り、カエルもフナも人も地域も文化も。様々なものに広げ、地域の特徴を見いだしてほしいです。豊岡とストラスブールの写真をお見せしましたが、どういう距離感、関係をつくるのか、考えていきたいものです。

今から半世紀以上前の1971年、コウノトリは環境悪化で日本の自然界で絶滅しました。韓国でも密猟で最後のペアのオスが死にました。一方で、ラムサール条約が作られ、深刻だった公害に対応するため環境庁も発足しました。マガンが天然記念物に指定されたのもこの年です。いわば、環境問題の「底」といえる年でした。

あれから半世紀以上が過ぎました。これらの写真は豊岡の円山川河口域と渡良瀬遊水地がラムサール登録地に認められた2012年、ルーマニア、ブカレストでの写真です。専門分野や各地における人や団体、国や自治体の取り組みは相当ハイレベルで、私にはとても追いつけないのですが、鳥の目のように俯瞰（ふかん）できる人、団体が少ないように思います。いわゆるコーディネーターが求められると感じています。後継者育成にあたっては、各団体や各地の事情に通じ、調整能力を考えていただければと思います。